

聖書：士師記 14：1～20

説教題：主によることだとは

日時：2014年10月12日

13章では「サムソンの誕生」について記されましたが、この14章からいよいよ「成人したサムソン」の姿が記されます。一般の小説等においても新しい人物が登場する際、最初の言葉や振る舞いには、その人の性格や人となりが端的に示されているものでしょう。果たしてサムソンはどうでしょうか。

1節に「サムソンはティムナに下って行ったとき、ペリシテ人の娘でティムナにいるひとりの女を見た」とあります。彼は帰って来て両親に言います。「私はティムナで、ある女を見ました。ペリシテ人の娘です。今、あの女をめぐって、私の妻にしてください。」期待を持って読み始めた私たちにとって、それ以上にサムソンの両親にとって、これは何と激しいショックを与える言葉でしょうか。神はこれまで何度も、異邦の民と結婚してはならないと命じて来られました。出エジプト記 34章 16節：「あなたがその娘たちをあなたの息子たちにめとるなら、その娘たちが自分たちの神々を慕ってみだらなことをし、あなたの息子たちに、彼らの神々を慕わせてみだらなことをさせるようになる。」申命記 7章 3～4節：「また、彼らと互いに縁を結んではならない。あなたの娘を彼の息子に与えてはならない。彼の娘をあなたの息子にめとってはならない。彼はあなたの息子をわたしから引き離すであろう。」

サムソンの両親は身震いしながら3節で言います。「あなたの身内の娘たちのうちに、または、私の民全体のうちに、女がひとりもないというのか。割礼を受けていないペリシテ人のうちから、妻を迎えるとは。」せっかく主から授かり、ナジル人として育ててきた我が子がこんなことを言い出すなんて！しかもペリシテ人から妻を迎えようとするとは！サムソンは言います。「あの女を私にもらってください。あの女が私の気に入ったのですから。」ここにサムソンの考え方が示されています。すなわち彼の判断基準は主のみこころではない。両親の意見でもない。やりたいことを私はする。私が気に入ったのだから私はそれをする。彼にとって大事なことは、主を喜ばせることでもなければ、両親に尊敬を払うことでもなく、自分を喜ばせることであり、自分の意見を通すことでした。彼は両親の反対を押し切ります。私がそうしたいのだから、と言って聞かない。この日、この家には何という悲しみが支配したことでしょうか。マノアとその妻は深い絶望の底に投げやられたのです。

しかし、今日の箇所を解釈する上で中心となるみことばが4節に出てきます。4節：「彼の父と母は、それが主によることだとは知らなかった。主はペリシテ人と事を起こす機会を求めておられたからである。そのころはペリシテ人がイスラエルを支配していた。」

ここにサムソンとペリシテ人の娘との結婚は「主によることだ」と書いてあります。これはどういう意味でしょうか。ある人はここに、「信者同志の結婚」の例外があると見ます。なぜならここに、信仰を持っていない人との結婚が主によったとはつきり書いてある！と。ある人はさらに進んで言います。サムソンの両親は頑固に、同じ信仰の民から相手を選べ！と勧めたが、それは愚かな熱心であった。このような例外もあり得るのだから、クリスチャンの親はクリスチャンとのみ結婚するようにとあまり子どもに強く勧めるべきではない、と。

そのように言う人は説明しなければなりません。主は律法の中で、異邦の民との結婚を禁じています。なのにその禁じたことを自ら導かれるとはどのように説明されるのでしょうか。主は時と場合によってご自分の律法に矛盾することをされるのでしょうか。律法とはそのようないい加減なものなのでしょうか。もしそうなら、私たちは何を信じ、何を生活の基準としたら良いのでしょうか。主はいつ律法に書いてある事の反対を御心とされるか分からないと恐れながら生活しなければならないのでしょうか。

ここでサムソンとペリシテ人の娘との結婚が主の喜びたもうところであったという意味で主がよしとされたと取るならアウトです。サムソンは神を無視し、両親のアドバイスも無視して、ひたすら自分の欲望の道を突き進んだのです。しかしそのことさえ神は用いて、ご自身のみわざを進められたというのがこの節の意味でしょう。主の目的は4節にありますように「ペリシテ人と事を起こす」ことでした。前回見ましたように、この時のイスラエルはペリシテ人の支配下にありながら、主に向かって叫び求めることさえしない霊的無感覚に陥っていました。このような姿は神の民にふさわしいものではありません。サムソンがナジル人として主に取り分けられているように、イスラエルは主に取り分けられた国民です。主を愛し、主の道に歩み、主を全世界に宣べ伝えることこそイスラエルの召命です。しかしイスラエルはペリシテ人と混じり、現状に甘んじて、道徳的・霊的に退廃していく中にありました。そんな彼らを何とか霊的眠りから目覚めさせ、ペリシテ人の支配から解き放とうと主は動いておられる。そのためにサムソンの悪さえ用いようとされたというのがこの4節の意味でしょう。

このような神の奇しい御手の代表的な現われは、イエス様の十字架です。あのイエス様の十字架も今日の箇所と同じように「主によることだ」と言えます。しかしだからと言って、イエス様を裏切ったユダや十字架に張り付けにした人たちの行動は正当化されるのでしょうか。あれは主の御心だったのだから、あまり彼らを責めてはならない、主はあのことを良しとしておられると言うべきでしょうか。彼らは自らの悪い心に従ってイエス様を殺したのです。彼らのしたことは当然責められなければなりません。しかし神はそれさえも用いて、救いのご計画を実現された。

今日の箇所も同じです。「主によることだ」とあるからと言って、サムソンの行動を主

が承認しているのではないのです。やはり彼のしていることは律法違反です。また彼の両親がこの結婚に強く反対する行動を取ったことは正しいことだったのです。ですからここは、信仰者同志以外の結婚を主が例外的に承認している箇所ではないのです。むしろご自身の御心に逆らって歩む者さえ用いて、神はご自身の計画を実現して行かれたという驚くべき摂理が語られている章なのです。

具体的な展開が 5 節以降に記されています。サムソンはティムナに下って行く時、ぶどう畑にやって来ました。これは民数記 6 章にしるされているナジル人の誓願への違反として描かれていると考えられます。それにもかかわらず神は彼に特別な力を与えておられる。1 頭の若い獅子が吠えたけりながら向かって来た時、サムソンは主の霊が激しく下って、それを引き裂きました。サムソンもびっくりしたでしょう。これは神によるなら、サムソンがペリシテ人をこのように倒すことができるというしるしです。しかしサムソンはこの恵みをわきまえません。彼は帰り道、あのライオンの死体を見にわき道へ入って行きます。すると見よ、そのからだの中に蜜蜂の群れと蜜がありました。パレスチナでは夏の猛暑で死体が急速に乾燥し、腐敗せず、そこに蜂が巣を作ることはあり得たことのようにです。サムソンは蜜を手にかき集めて、歩きながら食べます。それはどんなに美味しかったらうか、などと私たちは考えてしまいますが、ポイントはこれもナジル人の誓願への違反ということです。すなわち死体に近づいてはならないという規定への違反です。彼は両親にも食べさせました。もし両親が知っていたら、当然食べなかったでしょう。ですからサムソンはそのことは黙っていました。こうして彼はナジル人の 3 つの戒めの内、2 つを破りました。あとの一つは頭にかみそりを当てないことです。果たして彼はこれを守るのでしょうか。

10 節からは結婚の祝宴です。彼は付き人として 30 人のペリシテ人を与えられたので、彼らと亜麻布の着物 30 着と晴れ着 30 着をかけてなぞなぞをします。そうして出した問題が、先の「ライオンと蜂蜜」でした。ペリシテ人は一生懸命考えますが、答えが分かりません。それで 4 日目になって、サムソンの妻を脅迫し「聞き出さなければ、あなたとあなたの父の家とを焼き払う」と言います。そして彼女がサムソンに泣きすがった結果、サムソンは答えを教えてしまいます。ここにサムソンの弱さが示されています。彼は後に同じことを繰り返し、そこで決定的な災いを身に招くことになります。

こうしてペリシテ人に敗れたサムソンは、激しい怒りを燃やしてアシュケロンに下って行って 30 着の晴れ着を奪ってきます。19 節に「主の霊が激しくサムソンの上に下った」とあります。もちろんここにおける罪深い怒りはサムソンから出たものです。しかしこうして「ペリシテ人と事を起こす」という 4 節に記されていた主の目的が実現し始めています。ペリシテ人と偽りの平和に甘んじていたイスラエルの中のある人が、違う道を取り始めています。全く不思議なことですが、このようなサムソンを用いて、神の救い

のみわがが動き始めているのです。そして合わせて触れておくべきは、ここでサムソンとペリシテ人の娘との結婚は破局に至っていることです。もし主がこの結婚を御心とされたなら、どうしてこんな形で終わったのでしょうか。すなわちここにはつきりしていませんように、主が御心とされたのはペリシテ人との結婚ではなく、それを通して「事を起こすこと」でした。そして一旦事が起こり始めたなら、御心でない結婚は解消されている。御心でないことは主によって終わりとされ、主が目的とされたことだけが14章最後に実現し始めている。何と驚くべき主の導きでしょうか。

以上、ただ悲劇と混乱が支配しているような士師記14章ですが、私たちはここに示されているメッセージをしっかり受け取りたいと思います。先に触れたように、サムソンの両親は間違っていないで、もちろん、どんなに信仰深い親でも、地上にある限り、不完全さが伴います。しかし彼らは主に信頼してなすべきことをしました。そんな彼らが、前の章で見た喜びや希望はどこへ行ったのかというような現実ここで直面させられています。多くのクリスチャンの両親もこの夫妻と同じ立場に立たされます。自らの足りなさを覚えつつ、息子、娘たちにみことばを伝え、訓練し、祈り続けて来ました。なのにその子が、自分の意志で主の御心に反する道を選び取っていく。その時、親としては絶望的な気持ちになるでしょう。すべてが失敗したように思う。取り返しのつかない悲しみに突き落とされたように感じる。しかし私たちが忘れてならないのは、4節の御言葉です。「彼の父と母は、それが主によることだとは知らなかった。」何の良いこともない、すべては絶望的だと思われる事柄の上にも、私たちが知らない主のご計画と導きがあり得る。主はすべてのことの上に御手を置き、すべてのことを通してご自身の何らかの御心を進めようとしておられる。その御手を仰ぐ時、私たちは目の前の一見悲しい事実を全部否定するのではなく、そこから益を取り出すことができる主を仰ぐようにと導かれるのではないのでしょうか。

これは息子・娘の結婚ばかりでなく、人生の様々な問題にも適用されるべき真理でしょう。私たちは色々な状況に直面して、もうダメだ、もう終わりだと思います。仕事がうまく行かなくなった時、突然何かの病気にかかった時、思わぬ事故にあった時、かえがえのない家族や親友を失った時、…。その事実の前に私たちはしばしば立ち上がれなくなってしまいます。何も良い要素がそこにはない。しかしそこで私たちが今日の御言葉に従って思い起こすべきは、私に分かっていることだけが、この出来事の意味の全部ではないということ。私には見えていない隠れた意味がこの事柄の上にもある。私は分かっているが、神が持つておられて、やがて益として私にプレゼントして下さる意味がある。キリストにあつて私たちの罪を赦し、ご自身の子として受け入れて下さった神が、どうして意味のない災いを私たちに下されるでしょう。主はすべてを相働かせて益とする奇しい御手をもって、私たちを憐れみ、導いて下さるはずではないのでしょうか。

もしこのような主を仰がないなら、私たちは困難に直面して、自分の知っている枠の中だけでつぶれてしまいます。もっと本当は別の意味があるのに、その可能性を一切閉ざして自分を一層苦境に追いやってしまう。しかし私には知らない主の御手がこの事柄の上にもあることを思う時、私たちは主がこのことさえも用いて打ち開いて下さる新しい世界と導きを仰いで、ただ主に信頼する歩みに立ちあがるようにと力づけられるのです。

神がこのようなご自分を示しておられるのは、私たちの無頓着な歩みを奨励するためではありません。どんな中でも私たちが自分の小さな考えの中でつぶれるのではなく、大きな神の御手を仰ぎ見、そこに全部の希望を置いた生活をするためです。神は弱く罪深い私たちに、このようなご自身を信頼して従って来るようにと招いておられます。私たちはこのような神を私たちの神として知っていることを喜び、仮に自分が士師記のような暗黒時代に置かれているように思っても、私たちの思いを超えた御心と御手を持っていく下さる主に望みを置いて、自らの務めに励み、主に従う歩みを続けてまいりたいと思うのです。